

米国における「東亜同文書院大学」と 愛知大学の「中日大辞典現象」

経済学部助教授 李^り 春^{しゅん} 利^り



一、訪米の経緯

東亜同文書院大学（1901年設立）を源流にもつ愛知大学の中国研究は「第二の世紀」に入った。「第二の世紀」の幕開けの象徴は2002年の文部科学省21世紀COEプログラムの採択による愛知大学国際中国学研究センター（ICCS）の発足である。2001年の東亜同文書院百年祭が20世紀を締めくくったとするならば、2002年のICCS発足は21世紀への発進にほかならない。

私はたまたまICCS推進委員会のアメリカ部会に入っているので、米国の中国研究の拠点校と研究交流のネットワークを構築するために、2003年にICCS事務局長の山本一巳教授と一緒に2回にわたって、米国の主要大学を訪問した。

1回目は3月13日から3月22日までで、アメリカ西海岸のカリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）、UCバークレイ校、スタンフォード大学、ワシントン大学とハワイ大学を訪問した。2回目は9月7日から9月18日までで、中西部のミシガン大学とシカゴ大学、東海岸のプリンストン大学とハーバード大学を訪問した。

二、ミシガン大学＝全米初の「東亜同文書院大旅行誌」収蔵

今回の訪米で、予期せぬ発見ができた。それは、愛知大学とその前身校である東亜同文書院は米国でも広く知られていることである。

例えば、米国アジア研究の重要な拠点校であるミシガン大学のAsia Libraryは、中国書・日本書コレクションは全米最大級の一つである。2003年、ミシガン大学Asia Library

はUCバークレイ校と競って日米教育関連の基金会から助成金を勝ち取り、「東亜同文書院大旅行誌」マイクロフィルム版を収蔵した。同大学日本書コレクション館長のKenji Niki（仁木賢司）氏によれば、「東亜同文書院大旅行誌」の収蔵は全米初であるといわれている【写真1】。今後はさらに「中国調査旅行報告書」も収蔵する予定である。

東亜同文書院生の大調査旅行は、5期生から始まったといわれている。例えば、1906年の大調査旅行に参加した書院生は、中国切つての日本留学奨励派、洋務運動の推進役である湖広総督・張之洞（『勸学篇』著者）や両江総督・端方を訪問し、歓迎と協力を受けるなど、その出発点の高さが窺える。1コースは3ヶ月間、総計700コース、約5,000人の参加による40年間に及んだ大調査旅行（The Great Journey）は、世界中の大学や教育機関を眺めても、これほど徹底した組織的なフィールドワークはないと言っても過言ではない。その範囲も中国大陸のみならず、東南アジアやモンゴル、遙かシベリアにも及んでいた。

これらの調査記録をまとめた「大旅行調査報告書」（The Reports of the Great Journey）は、満鉄調査部資料と並んで、20世紀前半の中国社会経済に関する貴重な第一次資料であり、双璧を成し得る存在である。調査の目的や背景などは違うものの、徹底した実証主義と実地調査に裏付けられたこれらの調査資料が、アメリカや欧州を含めて世界的に高い評価を得ているのは、その価値からして当然である。満鉄調査部資料は世界的に評価され、欧米の一流大学の図書館に収蔵されているが、それと並ぶ重要性をもつ世界的な中国研究史料「東亜同文書院調査報告書」の研究・発掘はまだ発展途上にある。

この世界的な文化・研究の遺産の発掘・研

究・出版を強化し、国際的な視野でそのブランド価値にふさわしい形で世界に還元することは、愛大の重要な戦略的課題である。それは同時に愛大の国際的知名度を「形」にして、大学のアイデンティティを活かしながら内外におけるブランド力を形成するという意味で、今後大学間の厳しい生存競争に勝ち抜くための戦略的な切り札にもなりうる。

三、研究法としての大調査旅行と「地域研究」

東亜同文書院の独特な研究教育方法と戦後米国発の有名な「地域研究」(area studies)との関係に注目した米国の研究がある。

「東亜同文書院の大旅行を軸とした地域研究・フィールドワーク教育方法は、ジョージア州立大学のDouglas Reynolds教授(第4回東亜同文書院記念賞受賞)が喝破したように、第二次大戦後発展したアメリカの地域研究よりも遙かに早い時期に(半世紀—引用者)、しかも内容においてもアメリカに劣らない優れた教育方法であった。」(滬友会HP = <http://koyukai.hp.infoseek.co.jp/>)

「(氏は)東亜同文書院の大旅行調査を研究し、それが戦後米国で発展した地域研究よりも古い歴史を持つ優れたものであることを検証し、『地域研究の知られざる起源：日本の東亜同文書院』を刊行して広く世に紹介した。また戦前の日中両国の間に19世紀末から20世紀初めにかけての10年間、黄金の10年ともいべき日中蜜月の一時期があったこと、その形成に東亜同文会及び東亜同文書院があ



ミシガン大学所蔵の東亜同文書院大旅行誌
マイクロフィルム版 **【写真1】**

ずかつて大いに力があつたことを論証し、著書『新政革命』(英語版及び中国語版)により広く世に紹介した。」(東亜同文書院基金会HPより、同上)

地域研究の源流は、第二次世界大戦後、ハーバード大学のJohn King Fairbank教授を中心とする「地域研究」グループによって開発された有名な研究法にさかのぼることができる。複数の研究分野を跨る学際的な(interdisciplinary)研究が最大の特色であり、戦後アメリカにおける中国研究と発展途上国研究の水準が飛躍的に引き上げられたといわれている。

愛知大学名誉教授・元学長の牧野由朗先生によれば、1970年代中頃、Fairbank教授は愛大に招かれて講演したという。当時の講演テーマは中国の近代化(modernization)についてであり、自分も質問したと記憶されている。

2002年、COE・ICCSの申請・発足にあたり、研究拠点リーダーの加々美光行教授の問題意識の根幹をなしているのは、まさにこの地域研究の限界を克服し、新しい中国研究の方法を模索・確立することであった。

四、「中日大辞典現象」

約250年の歴史をもつプリンストン大学の美しいキャンパス・センタービルの3階に、かつてアルベルト・アインシュタイン博士が教えていた教室(302号)がある。この「アインシュタイン教室」と同じ階の反対側に、プ



プリンストン大学東アジア図書館所蔵の
ぼろぼろの中日大辞典(初版) **【写真2】**

リンストン大学東アジア図書館がある。その中の一角で、私は中日大辞典を発見した。収蔵されているのは1968年に出版された中日大辞典の初版である。辞書は相当使いこなされており、本体はかなり傷んでいる(写真2)。「ご苦労さま」と言ってあげたいぐらいだった。

東アジア図書館副館長のMartin Heijdra博士によれば、愛知大学といえば、すぐ『中日大辞典』が思い浮かぶという(この評価は中国でもまったく同じである)。彼はオランダ人で、同国の中国研究の名門校・ライデン大学の出身で、プリンストン大学で博士号を取得した後に、ここに勤めるようになった。彼の専門は中国研究であるが、中日大辞典を使って日本語を覚えた。ライデン大学では、東アジア研究の専門であれば、中国研究の専攻でも日本語が必修であるという。

また、館長のTai-loi Ma博士はもともとシカゴ大学で長く勉強し、仕事をしてきた。彼が学生の頃、米国での東

アジア研究は中国語と日本語両方の習得が要求されていた。日本ベースの中国研究の成果を読むために、日本語が必修である。そのために、中日大辞典は広く使われていた。中日大辞典自体大変素晴らしい辞書であるが、当時はそれしかなかったという。

プリンストンのほかに、今回訪問したミシガン大学、ハーバード大学燕京図書館(Harvard-Yenching Library)でも、中日大辞典が発見された。ハーバード燕京図書館では中日大辞典第2版が収蔵されていた(写真3)。ハーバード大学フェアバンク東アジア研究センター長のWilt Idema教授も中日大辞典を愛用していた。

中日大辞典が刊行された時の世間の評価は高く、朝日ジャーナルや毎日新聞は「この辞典の出版によって、日本は中国語に関しては世界の学界に誇り得る金字塔を建てた」と絶

賛していた。欧米の大学では東アジア研究専攻の学生に向けて、カリキュラムの中に中国語と日本語両方を必修科目として組み込まれており、時代に先駆けて発行された『中日大辞典』はこのように構造的に広く使われていた。中日大辞典が日中両国を越えて、広く世界的に使われてきたこの現象を、ここであえて「中日大辞典現象」と呼ぶことにしよう。

五、愛大の中国研究戦略=世界的なブランド形成に向けて

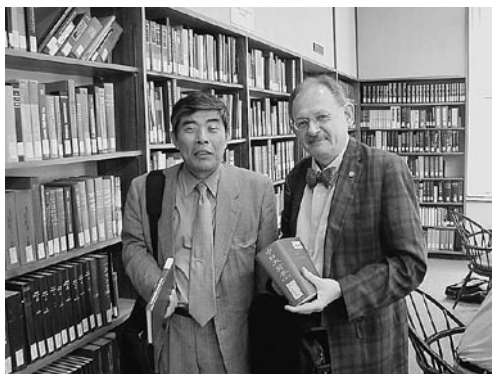
愛知大学と東亜同文書院大学は過去100年間にわたり、20世紀の日本における中国研究

をリードしてきた。それはわれわれ当事者の認識を超えて、中国だけではなく、欧米でも高く評価されている。愛大はもっと自信を持ってよさそうである。

中国研究の「第二の世紀」に入ったいま、愛大は世界的な視野で東亜同文書院大学記念センターおよびそれに

関する研究の戦略的な位置付けを再考すべき時期にきている。つまり、記念センターに展示機能だけではなく、研究支援機能を付加して、文科省を含めた内外の競争的研究資金の獲得や戦前の関連名著のリフレッシュ発行(例えば、オンデマンド印刷技術で)などを視野に入れて、国際ネットワークの中で東亜同文書院大学の世界的なブランド価値を再認識すべきである。それが愛大のブランド形成につながるもので、ひるがえって日本国内での知名度と競争力の向上にも貢献できる。

COE・ICCSは20世紀後半の現代中国研究の世界的な研究拠点を目指しているのであれば、東亜同文書院大学記念センターは20世紀前半の近現代中国研究の世界的な研究拠点の形成を目指しても良いのではないか。それが21世紀愛知大学の中国研究の両輪をなすものである。



Harvard-Yenching Libraryで山本一巳教授とRonald Suleski博士(写真3)